

古民家『聴福庵』

ききふくあん

〈新春企画 『聴福庵』 縁起物特集〉



縁起物とは

日本の縁起物には、五穀豊穰、大漁追福、商売繁盛、家内安全、無病息災、子孫繁栄、招福祈願、厄除祈念、安寧長寿、夫婦円満などにまつわるものがたくさんあります。

他にも祭礼や社寺の参拝者に授与・販売する歴史的、文化的なものや日本古来より伝わる祭りや福男・なまはげなどの演者、力士など紙の依り代になった人や長寿や薬事効果を期待して食された物として鰻や初鰹なども縁起物とされています。

また、世界大百科事典には縁起物について以下のように書かれています。

「社寺や諸神諸仏の開基、由来、靈験などを記したものを縁起というところから、兆（きざし）の起こる由来も縁起といい、兆に対する俗信から縁起の良し悪しをいうようになり、良い縁起を得れば開運をもたらし、悪い縁起に遭えば不運の結果を招くとされた。そのため将来かならず幸運が招かれるという心意に基づいて、縁起の良い呪物が想像された。

それが縁起物である。多くは神社や寺院から授けられ、正月初詣に授与される破魔矢（はまや）は、悪魔をはらい幸運を射止めるものであり、起上り小法師や達磨は、七転八起の故事から出世を約束される縁起物である。」



新春、一発目の特集は「縁起物」についてです。

「縁起を担ぐ」などの言葉もありますが、

皆さまはどのようなものを思い浮かべるでしょうか？

そして、縁起物の起源をご存知でしょうか？

今回は、『聴福庵』にある縁起物をご紹介しながら、その謂れを見ていきたいと考えています。

また、日本の暮らしを見ていくことで、縁起物にあやかって暮らしてきた日本人の精神性とはどういったものが、見えてくるのではないかと感じ、特集を企画しました。



鏡餅

鏡餅の名前の由来であるこの鏡は、日本の神話の中で出てくる三種の神器の一つ「八咫鏡」からとったものです。丸い餅の形が銅鏡に似ていてその鏡に映る自分を「鑑みる（かんがみる）」ということから「鑑餅」となり次第に「鏡餅」と名前が変化したと言われています。この「鑑」という字は、「金」は金属の象形を覆う様子を指し、臣は大きく見開いた目の象形文字、そして臣の右横にあるのはタライを覗く様子の象形文字、皿は水の入っているタライの象形文字です。この金と監の合わさった会意兼形声文字である鑑には、金属製の鏡を意味します。ありのままの価値をそのままに映し出すという意味でもあり、鑑定、鑑賞などでつかわれます。



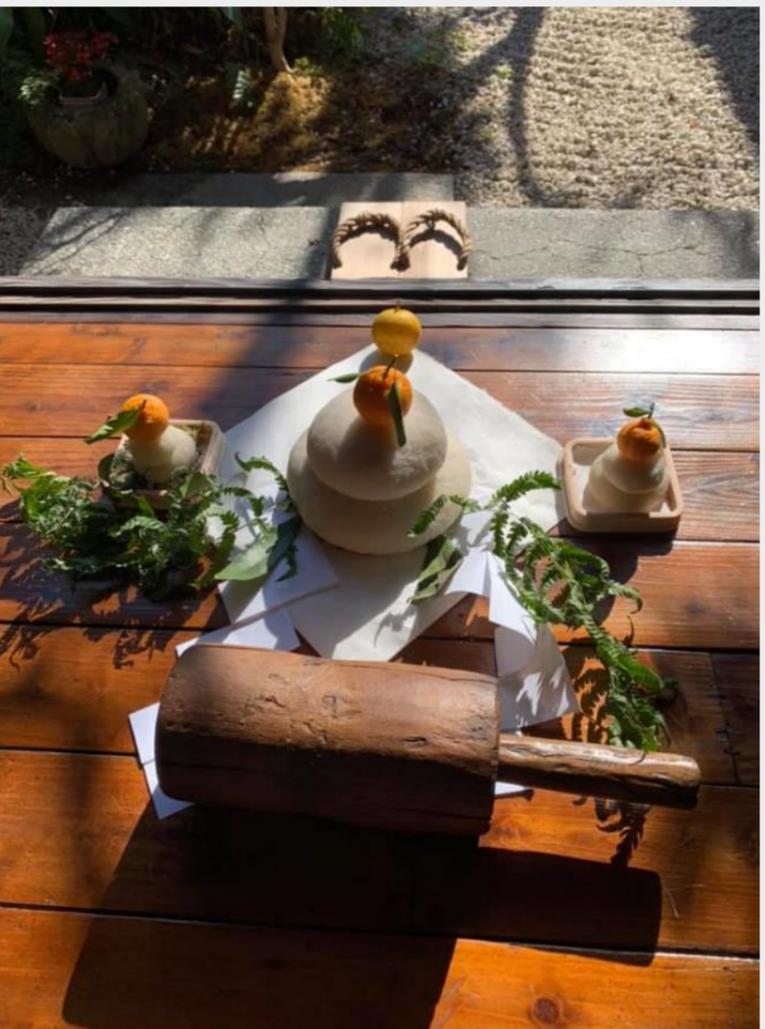
お正月飾りをして歳神様のお出迎えをします。



縁起の良い日
鏡餅をお祀りするのは縁起が良い末広がりの8がつく12月28日にするのが一番適していると言われているからです。
むかしの人は縁起を担ぐため餅つきをする日も選んでいたようです。例えば12月29日は「二重に苦しむ」からとか、それに12月31日は「一夜飾り」慌てて準備をしたとなると歳神様に失礼に当たるから餅つきはしないほうがいいと伝えられています。実際には、29日を福（ふく）と呼ぶため構わずに29日に御餅つきをする地域や家庭もあるそうです。



鏡餅
丸形のお餅は円満や心臓を表し家族の心身の円満を表し、二段重ねなのは、太陽と月、陰陽を表し日月円満、つまり日々が充実して円満に過ごせることを意味します。
またお年玉の由来もこの鏡餅からで、これは歳神様の依り代になったものだから「歳神の魂」が宿ったものからきています。つまり御歳神魂（おとしだま）ということです。年長者から子どもたちへ食べさせたことで、お年玉を配るようになったといえます。



鏡開きは武家から始まった行事のため、鏡餅に刃物を使うことは切腹を連想させるのでよくないとされました。そこで手か木槌などで割ることになりましたがこの「割る」という表現も縁起が悪いとされ末広がりの意味する「開く」を使って「鏡開き」というようになったといいます。



鏡開き

お正月の間ずっと歳神様がいらっしやる松の内の間は鏡餅としてお祀りしておりますが松の内が過ぎたらさげて歳神様を遠方へとお見送りします。その際、歳神の依り代であった鏡餅には歳神様の魂が宿っておられる鏡餅を食べることでその力を授けてもらい一年間の無病息災を祈念したのです。歳神様にお供えした鏡餅を家族で一緒に食べることで始めてこの行事は滞りなく実施されたことになるそうです。



七福神とは、福をもたらすとして日本で信仰されている七柱の神で、日本の正月の風習のひとつに、七福神巡りがあります。七福神を参拝することには、不老長寿、商売繁盛、五穀豊穰、家内安全など、所願成就のご利益があるとされています。

神とは、「栄える木」あるいは、神域と人間の領域の境に植える「境木」が転じたものであり縁起が良く、花言葉は、『控えめな美点』『揺るがない』『神を尊ぶ』だそうです。

七福神と榊（さかき）



弁天様がもつ琵琶と形が似たしゃもじを宮島参拝のお土産物として売り出したらどうか？と島民に、宮島光明院の修行僧が薦めたことが始まりなのだそうです。

また、しゃもじはその用途から「相手をメシとる」「飯取る」や「すくいあげる」などと言われ、しゃもじは縁起物として親しまれています。

宮島のしゃもじ



しめ縄飾りと椿の室礼。



しめ縄

しめ縄には、「神聖な場所」であることを歳神様に示す意味があります。また、不浄なもの悪霊などが入ってこないための魔除けでもあるとされ、しめ縄は、記紀神話に登場します。

天照大神が天岩戸から出てきたとき、もう二度と岩戸に戻れないようにしめ縄を張りめぐらせたことに由来するといわれます。

しめ縄の「しめ」には「占める」＝「神様の占める場所」ともいわれ、しめ縄には、稲の藁（わら）が使われているのは、日本が昔「瑞穂国（みずほのくに）」と呼ばれていたためだといわれています。しめ縄は、漢字で書くと「注連縄」「七五三縄」「標縄」などとも書きます。藁を左に縫（よ）り、何枚もの紙垂（しで）を垂らします。その紙垂と紙垂の間に、三、五、七筋の縄を垂らすので「七五三縄」と書くそうです。



日本には、古く、年の暮になると、山から降りて来る、神と人との間のあると信じられた時代がありました。これが後には、鬼・天狗と考へられる様になったのですが、正月に迎へる歳神様（歳徳神）も、それから変わつてゐるので、更に古くは、祖先神が来ると信じたのです。歳神様は、三日の晩に尉と姥の姿で、お帰りになると言ふ信仰には、此考妣二位の神来訪の印象が伝承されてゐる様です。

（折口信夫氏「門松のはなし」より）

門松の話



門松は、お正月に遠来から歳神様が家に来てくださるようにその目印としてお祀りするものです。古式の門松は、平安時代の「小松引き」が由来です。そのため玄関には「根」がついたままの松を飾ります。これは歳神様が訪れて幸せが根付くようにという縁起によるものです。そして裏玄関には根が切られた松を飾っています。これは厄を断ち切り根付かせないという縁起によるものです。

古式の門松



南天

昔から厄災を退ける力があるといわれ、「難転(〜難を転じて福となす)」「の語呂あわせで、縁起かつぎに使われる木です。冬の寒いときにも可憐な赤い実をつけるので、慶事の飾りにも喜ばれて使われるそうです。昔から正月用の生け花や寄せ植えとして人気があり、正月の掛け軸には水仙と南天を描いた 天仙図が縁起物として好まれたようです。



稲わらの鶴亀

中国では仙人が住む不老長寿の地として信じられた蓬莱山の使いとされ、大変めでたい動物とされていたようです。日本においても「亀は万年・鶴は千年」と言われて、鶴とともに「長寿を象徴する吉祥の動物」とされ、めでたい生き物として尊ばれています。また、亀の甲羅の紋様の六角形は吉兆を表す図形ともされて、中国の古い言い伝えから、縁起のいいものとされていたようです。



椿と水仙

椿は、冬にも枯れずに茂る葉は柙(さかき)と同様、繁栄をもたらすもので、特に白椿は、新年の清浄感に通じます。水仙は、厳しい寒さの中に美しい花と大変良い香りがあることからお正月の花によく使われるそうで、雪の中でも咲き、いち早く春の訪れるために咲くので雪中花という別名があります。水仙は中国の漢文にでてくるものから付けられたようで、美しい花の姿と強い芳香のある姿がまるで仙人のようなところから命名されました。



金柑

「金柑」の大きさが丁度お金程で、丸い果実が、全体に鈴なりになり、金色に輝いて見えることから「金柑」の名前がついたとも云われています。また、「金冠」とも呼ばれ「財宝」などを表す意味も持ち、「金冠」という当て字から、金運を得られるようにという願いが込められています。また、ふくよかな姿は福德、黄色は黄金を意味し、多くの実は子孫繁栄を表すといえます。



花嫁のれん

「花嫁のれん」は、幕末から明治時代初期の頃より、加賀藩の能登・加賀・越中に見られる、庶民生活の風習の中に生まれた独自ののれんです。花嫁が嫁入りのときに「花嫁のれん」を持参し、花婿の家の仏間の入り口に掛けられます。玄関で合わせ水の儀式を終え、両家の挨拶を交わした後、花嫁はのれんをくぐり、先祖のご仏前に座ってお参りをしてから結婚式が始まるというものです。「のれんが風になびくように、婚家の家風に早くなびき（馴染み）ますように」との意味があります。また、仏壇に参る前のれんをくぐることによって、頭についた穢れを払う、ともいわれています。(きもの処 凜屋HPより)



扇

扇の語源は、中国の書「説文(せつもん)」によると、「扇は扉だ」と記され、トビラと読んだそうです。解字してみると、「戸」と「羽」を合わせた文字で、戸が羽根のように動き、故にあおいで風を起こす道具になります。

扇または扇子の事を昔から末広とも言い、開いた時に先端すなわち末の方が広がることから、繁栄を意味して縁起がよいことにつながるからだそうです。とりわけ御祝儀として扇を贈り物にする風習は室町時代に起こったもので、以後現在に及んでいるそうです。

(白竹堂HPより)



竜の鬚(ひげ)

古くから縁起のよい植物として重宝されてきたといえます。薬としても知られており、鬚のような根のところどころにある小さなイモのような部分は、麦門冬という生薬となり、強壮、咳止めに効果があるとされています。

細く伸びた葉っぱが、竜の口ひげを連想させることから、リュウノヒゲという和名が付けられました。別名である「蛇の鬚」は、草が蛇のように見えることに由来しています。

この別名が元となって、ギリシャ語で蛇を意味する「Ophio(オフィオ)」と、ヒゲを意味する「Pogon(ポゴン)」が学名の語源となりました。



鯉節(勝男武士)

鯉節を語呂合わせすると「勝男武士(かつおぶし)」となり、勇壮で威勢の良さを感じさせる言葉になることから、男の子の出産祝いや端午の節句などのお祝いとして用いられるようになったと言われています。昔は、カツオを素干しあるいは煮た後に干して乾燥させ保存食にしていたそうです。干して乾燥させる際にカツオの身が締まって硬(堅)くなることから堅魚(カタウオ)と呼ばれるようになり、これが後にカツオに変化したという説があります。この「堅」という文字が、夫婦や、贈る側・贈られる側の絆を堅くすることを連想させることから、縁起物として用いられるようになったと言われています。

【聴福庵を通して思うこと】

以前、「聴福庵」の動物特集を組んだ時から、年明けに「縁起物」特集を組みたいと考えていました。「縁起がいい、縁起がいい」と小さい頃から、言葉としては何度も耳にできており、「いい」と言われて嫌な気持ちはしませんが、果たして「縁起がいい」とは何か、そして、どういったものが縁起がいいと言われているのかを見てみると、実に様々なものがあることを知りました。

以前、ウィスキーの醸造をモデルにした映画を観た際に「天使の分け前」という言葉を知りました。それは、ウィスキーの熟成過程で起こる蒸発のことを総称した表現で、樽に天使が住み、ウィスキーが減っていくのは天使が飲み、その分け前をもらっていると言っていました。そんな逸話を聞くと、海外の方にもきっと「縁起がいい」という意味が伝わるかなと思いました。

今の子どもたちに「縁起がいい」と言っても伝わるかな？と一瞬考えてしまいましたが、言葉で伝えようとするよりも楽しい雰囲気子どもたちは伝わるのだろうと、自分の子どもの頃を思い返しても、感覚的に身に付いていくものなのかなと感じました。

第98号ミマモルジュメルマガジン 2019年1月14日発行

 **caguya**

〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメルマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、

QRコードからお願いします。



一陽来復御守

「一陽来復(いちようらいふく)」とは、冬至の別名。太陽の力が最も弱った後に日々回復していくことから、冬が終わって春になるという意味や、これから幸運が訪れるといった意味合いがある言葉です。

東京都新宿区にある穴八幡宮に伝来する「一陽来復御守」は、財運・金運アップのお守りとして、江戸から今に伝わる特別なもののようにです。